

イギリス保守党の声明（2007年11月29日）

〔翻訳：末藤 美津子（東京未来大学）〕

PISAの結果は、政府がわが国の子どもたちを将来に向けて適切に準備させることに失敗したことを示している。

PISA2006の結果の先行発表により、イギリスの科学的リテラシーの国際順位が2003年には7位であったのが、2006年には14位であることが明らかになったことを受け、保守党の影の内閣の「子ども・学校・家庭省」大臣であるマイケル・ゴープは、次のように述べている。

「前回、わが国は、読解力の国際順位を下げたが、今回、わが国は科学的リテラシーで国際順位を大幅に下げた。こうした国際的な学力調査の結果は、私たち保守党がこれまで警告してきたことが正しかったことを証明している。

政府は、詰め込みとテストによってわが国の子どもたちを将来に向けて適切に準備しようとしたが、それに失敗した。また、政府は、試験を極めて厳格なものとすることによって、国際的な競争力を維持しようとしたが、それにも失敗した。

わが国におけるGCSEの科学の試験には、例えば、月を観察するには顕微鏡を用いるべきかどうかを問うような問題が含まれている。政府は、失敗した学校を建て直すために実行すべき教育改革に全く逆行しつつある」。

イギリス自由民主党の声明（2007年11月29日）

科学的リテラシーの国際順位が落ちたことは、憂慮すべき神の思し召しである。

OECDのPISA2006により、わが国の15歳の生徒の科学に関する学力が発表されたのを受け、自由民主党の影の内閣の「子ども・学校・家庭省」大臣であるデービッド・ローズ下院議員は、次のように述べている。

「報告書は、憂慮すべき読解力と同じ結果を示している。

政府は、1997年以降、わが国の教育水準は劇的に改善されたと主張しているが、今回、PISA2006においてイギリスの国際順位が急落したことは、そのような主張に疑問を投げかけている。

今週公表された二つの国際学力調査の結果は、政府の政策が本当にうまくいっているかどうかを私たちが知るためには、教育水準に関する独自の機関を制定することが必要であることを示唆している」。

全英教員組合の声明（2007年11月29日）

PISA2006の科学的リテラシーの結果に関する先行発表を受け、ヨーロッパ最大の教員組合である全英教員組合のステイブ・シノット代表は、次のように述べている。

「PISA2006はPISA2003やPISA2000と全く同様のものではないにもかかわらず、この先行発表には、いくつかの混乱した情報が含まれている。

今回のイギリスの国際順位は、わが国の学校にとっては良い知らせとなっている。つまり、がんじがらめの科学のナショナル・カリキュラムのせいで、わが国の子どもたちは、他国の子どもたちとくらべて、科学をおもしろくないと感じているかどうか検討されなければならない」。